

# 中部南部太平洋諸島の言語に関する 資料について

西野照太郎

## 1. はじめに

ここで太平洋諸島というのはオセアニア（大洋洲）のうち、オーストラリアとニュージーランドを除く島嶼、したがってほとんどが熱帯に属する中部、南部太平洋諸島を指す。したがってフィリピンやインドネシアの島々は含まれない。

言語の面からいえば、いわゆる「オーストロネシア語」もしくは「マラヨ・ポリネシア語」の中で、極めて限られた——その言語の地理的分布範囲は広いが——言語群に限定することにした。すなわち、ここで資料紹介の対象とするのは、マイクロネシア諸語、メラネシア諸語、およびポリネシア諸語ということになる。たとえば日本では泉井久之助博士のように、マイクロネシア諸語を一つの範疇と認めないで、チャモロ語、パラオ語などはインドネシア語派に分類し、カロリン語、マーシャル語などはメラネシア語派に分類する説もある。しかし、本稿ではマイクロネシア諸語をも、メラネシア諸語およびポリネシア諸語と対等に、一つの独立の言語群として紹介の対象にすることにした。

マイクロネシア諸島、メラネシア諸島およびポリネシア諸島の言語は、いずれも極めて僅かな人口の島民が母語とする多くの方

言に分かれている。そのためにその諸島が植民地として統治されてきた時代を通じて、キリスト教伝導者や例外的な外国人事業家や行政官を除いて、それらの諸言語は亡び行く未開野蛮な言語と考えられ、人類学者が調査研究の手段として関心をもったにすぎなかった。言語学者がこれらの言語を調査研究の対象とするに至ったのは、僅か数十年前からのことにすぎない。植民地主義国の統治方針としては、統治国によって強弱の程度の差はあったにしても、いわゆる同化主義的な立場からこれら土着の諸言語を無視し、自国の言語を島民に押しつける原則をとってきた。

しかし、最近は一国の中でも地方の時代といわれるように、世界的にもかつての被圧迫民族や少数民族がもつ固有の言語文化が見直され、その保護をはかることが人類の文化を高めるわれわれの使命だと考えられるに至った。オセアニアの島嶼諸国の島民の側においても、自分たちの固有の言語こそ自分たちのアイデンティティを、確立するものだとして重視する傾向を強めてきている。こうした世界的な思潮を背景として、マイクロネシア諸語、メラネシア諸語、ポリネシア諸語についても国際的な協力の下に、言語学的な総合調査や共同研究が盛んになってきた。本稿はそのような動きを

知るための参考として、ハワイ大学とオーストラリア国立大学において、出版されている言語学者たちの調査研究シリーズの一部を、簡単に紹介する目的で執筆したものである。

しかし、その前に私は最近の国際的な言語学的研究と対比する意図で、かつて日本人が個人的な関心から行ったマイクロネシア諸語の調査研究の特色を、その僅かな資料を中心に歴史的に回顧しておくことにしたい。

## 2. 日本人による研究

私は言語学については全く知識がないが、私の知りえた範囲で最初にマイクロネシア諸語について、関心をもち、邦文の簡単な資料を残したのは、横浜の商人篠宮龍太郎という人物であった。篠宮は明治30(1897)年に当時スペイン領だったマリアナ諸島、カロリン諸島を歴訪し視察して帰国したが、教職にあった友人に依頼してその見聞をまとめ、明治32(1899)年に『最近探検南洋事情』と題する一本を刊行した。

同書の中で篠宮はマリアナ諸島に関する部分と、カロリン諸島に関する記述の中に、それぞれ言語に関して紹介した一章を設け、そこに前者にはチャモロ語、後者にはカロリン語のそれぞれ100余の単語と、さらに簡単な日常会話とを仮名で表音し、日本語の意味をつけて列挙している。私はそのチャモロ語の分について、後に述べるハワイ大学刊行の Chamorro-English Dictionary によって調べてみたが、ほぼその訳語は正確であることを知った。もちろん、それは決して言語学的な資料とはいえないけれども、日本人によるマイクロネシア諸語の最初の紹介者として、篠宮は歴史的に記録さるべき人物だといえよう。

しかし、言語学的な評価の点からもっと重視すべき日本語の文献は、神戸の人である田中鎮彦が自費出版した『中部加羅林島語案内』であろう。これは大正10(1921)年に神戸で刊行され、発元元は宝文館(東京・大阪・神戸)となっているが、「自序」の前に大正4(1915)年6月付、海軍次官鈴木貫太郎の早川鐵治宛書簡と、大正7(1918)年7月23日に神戸で著者と南洋貿易会社員亀山氏を前列中央に、南洋観光団として来日したトラック島民7名が、記念撮影した写真一葉とが掲載されている。

鈴木貫太郎の書簡は、「過日得御送付候田中鎮彦氏ノ調査ニ係ル中部カロリン島語案内ハ南洋群島官憲ノ執務上多大ノ便益可有之ト存候ニ付早速同官憲ヘ回附可致候条田中氏ヘハ貴殿ヨリ可然謝辞御伝致ヲ得度……」という内容である。早川鐵治は著者の先輩で当時の憲政会院内総務だが、田中はマイクロネシア諸島が日本海軍の占領下に置かれたので、統治上の一助になればと本書の原形となった1冊を、早川を介して海軍大臣に提出したのであった。鈴木貫太郎次官の書簡はそれに対する礼状なのである。

そこで田中の大正9年11月に書かれた「自序」からその最後の部分を引用しておく。

「本書は元来之を上梓するの意志があったのではなく最初一本を海軍当局に提出せるのみにて爾來六年原稿は空しく篋底に放棄せられた儘であったが……頃日南洋事業に関係せる某氏と会見の砌談偶々此事に及びたるに某氏は此種の書は仮令需用者多からざる迄も亦容易に他に求むべからざるがゆへ公刊して之を該方面の事業に手を染め居る人及染めんとする

人々の便に供することは官憲の爲にするよりも遙にデモクラチックの進り方ではあるまいかと熱心に勸説を受けたるに端を発し性来の好事癖と相俟って矣に若干を印刷頒布することとしたのである。」

田中は自序によれば明治23(1890)年6月小笠原に渡り、半年後にマリアナ諸島、カロリン諸島に渡り(「トラック島に日本人最初の足跡を印し」)、その後はトラック島を拠点に前後7年間、南はビスマルク諸島にまで「貿易開墾等の調査」に従事した人物である。そして「我々同胞が過去に於て血と汗の値を賜け」たマイクロネシア諸島が日本の統治下に入ったので、「私としては多少の責務を尽す機会を捉えた」気持から、「果して之が官憲の爲何程の便宜となったか否かは量り難けれど」中部カロリン島語案内を急遽書き綴って海軍当局に提出したのだという。

本書の裏表紙には英文で“A Caroline-Japanese Glossary” edited by Morihiko Tanaka. The First President of the Japanese Residents' Association of Truk と印刷されている。(なお President は誤植で President となっており、その第一頁上段には別の英文タイトルが The Alphabetical Caroline (Truk) Japanese と書かれ、また田中の肩書も The First Director of Japanese Society Truk と変っている)。

つまり本書は縦書き70頁が中部カロリン島語案内で、単語、島語に関する定則、会話、渡航者の心得という4章に分れ、裏から30頁が横書きローマ字表音のカロリン語の単語に、日本語の意味をつけた部分で構成されている。「中部カロリン島語」という理由について田中は、「本書掲ぐるとこ

ろの島語は中部カロリン、トラック列島語にして……其人口に於てカロリン群島中最多数と称せられホール、ポロアド、モートロック諸島に至る迄本語の通用圏内に包括せらるゝのみならず其位置群島の中央部に位するを以て東西カロリンに比較的多くの共通語を有し之を代表的カロリン島語と称する又敢て不可ならんか」と述べている。(不可は可の誤りでであろう)

田中によればトラック島から日本に引揚げたのは明治30年だという。ここで前記『最近探検南洋事情』の中で、篠宮がトラック島には12~13人の日本人が、日本人会を組織して結束していたと書いていたのが思い出される。田中が The First President of the Japanese Residents' Association. あるいは The First Director of Japanese Society Truk と書いているのは、彼がそのトラック島日本人会の初代会長だったからだと思われる。

ところで、田中は南洋群島の海軍官憲にカロリン語入門書を提供したが、日本政府当局は志賀重昂が大正7(1918)年4月に書いた『南洋占領諸島の処理』で勸告したように、マイクロネシア諸島民の教育のため「教師を増発し、唯是れ日本語の普及を計る」同化政策を実行に移し、マイクロネシア諸語を日本人が調査研究するという側面は、全く問題とされなかった。そのために日本の学界においてもマイクロネシア語の研究は全く無視されていた。わずかに柳田国男の実弟でアカデミズムの枠外にいた松岡静雄(1878~1936)が、太平洋戦争前の日本における代表的なマイクロネシア言語学者といえる。

松岡は海軍軍人となりオーストリア駐在武官などを勤めて、ドイツ語や英語に堪能であったが、第一次世界大戦のさい(大正

3年10月), 連合陸戦隊を指揮してカロリン群島に上陸した。翌年病をえて帰朝したがその頃からミクロネシアの言語に強い関心をもつに至った。大正7年海軍大佐を最後に願い出て退官し, その後は自由な巷の学者としてミクロネシア諸語の研究を続けた。

松岡は昭和2(1929)年に刊行した『ミクロネシア民族誌』(岡書院)の中で, ミクロネシア諸語研究について次のように書いている。

「諸民族の言語を記録して永久に伝えることは学術上極めて重大なる意義がある。其故に現に朝鮮語, アイヌ語, 沖繩語の研究が勃興し, 台湾蛮語の多くは年来巨額の経費を支出して採集せられているのであるが, ミクロネシア諸語のみは今日まで言語学者間の問題とせられて居なかつた。新附の民なるが故に継子扱せられるのは甚だ悲しむべきことであるので, 私は不完全ながら『チャモロ語の研究』一篇を世間に発表し, 尚健康が許すならば他の諸語にも指を染めたいと考えて居る……。」

その『チャモロ語の研究』(郷土研究社152頁)が出たのは大正15(1926)年, すでに健康を書して鶴沼に隠棲していた時であった。彼はチャモロ語を研究する理由を同書の中で次のように書いている。

「(2千人をこえない日本統治下のチャモロ人は) やがては新来の内地人, 沖繩人等と混血, 同化するか, 然らざれば自滅するの外はないのである。せめて今のうちに此特異な民族の言語, 風習を記録して置きたいといふのが我等の切なる希

望である」

その後松岡はミクロネシア諸語の研究成果を, 次のように順次刊行していった。

- 昭和3年9月 「中央カロリン語の研究」  
郷土研究社 264頁
- 昭和4年6月 「マーシャル語の研究」  
郷土研究社 267頁
- 昭和5年3月 「パラウ語の研究」  
郷土研究社 363頁
- 昭和5年10月 「ポナベ語の研究」  
郷土研究社 265頁
- 昭和6年8月 「ヤップ語の研究」  
郷土研究社 240頁

昭和10年3月「ミクロネシア語の総合研究」  
発行人池田伸一 565頁

この最後の「ミクロネシア語の総合研究」の序文の中で, 松岡は自己の研究目的を次のように書いている。

「私の研究の目的は決して島民語の普及若くは発達を企図する為ではなく, 『中央カロリン語の研究』の序文にも述べたように, 島民の幸福は寧ろ一日も早く伝来の言語習俗を忘れて日本民族に融合することにあるのであるから, 尋常の文典又は会話篇を縮集することは大局からいえば無用の業に属すと信ずるのであるが, 其の未だ亡びざるに先立ち島民語の系統, 本質, 特色等を詳にして置くことは, 一般言語学上少からぬ貢献であるのみならず, 之によってこの島民の種別, 分布状態, 周囲民族から受けた影響が判然とあらはれ, 民族学的にも得る所が多いと信ずるのである」

松岡がこのマイクロネシア語の総合研究のために払った努力は、日本人によるオーストロネシア語の調査研究の中では、極めて特異な性格のものであった。その第一は彼自身が病弱であったせいもあるが、専ら諸外国の学者の調査研究成果を収集して、現地の住民が実際に使用している言語とは無関係に、机上でその学者たちの説を整理分類する形で、自己の研究を集積していったことである。そして第二はマイクロネシア人の間に文字がなかったため、欧米人によるローマ字の表音が行なわれてきたが、松岡はアルファベットはまだマイクロネシア文字となっていない、と考えて次のようなカナ文字表音を主張し、彼の著書はそれを実践していたことである。

「マイクロネシアの語音も後述の如く頗る国語に類するものがあるから、若し此民衆の為に新に文字を設定するとせば、我カナと原則を同じうするものなることを要し、即今字を以て之を表記するに当りても、カナを用ひることが、少くとも我々日本人に取っては最も便利であり且適切である。それ故に本書に於ては断然カナを以て転写することにした……。」

松岡のマイクロネシア語研究の第三の特異性は、「マイクロネシア語の総合研究」の一種の副題として、括弧つきで示されている（国語に及ぼしたる南方語の影響）を、明らかにしようとした立場に求められる。同書の「附録」として521～553頁に掲げられたこの副題と同じ題の一文は、そうした松岡の立場を知るのに役立つものといえる。しかし、ここでは「序」の中からその主旨を引用しておくことにしたい。

「大なる注意を要するのは国語との関係で、上掲諸語就中『マーシャル語の研究』中に指摘したように、此等の民族語と国語との間に偶合以上の本質的親縁を発見するのであるが、……同一言語を用ひた民衆が長い長い才月の間に四方に分散し、到所に於て先住民又は後日の渡来者の言語と融合して各自独得の言語を構成したものと推断せざるを得ない。国語が大体に於てウラルアルタイ語系に属しながら、大なる異色を有することは、世界の言語学者の不可解とする所で、南方系の混入の結果であろうとは推測せられて居るが、尚その転入の経路、変遷の様式等について考察を加へたるのがない」

昭和18（1943）年に岩波書店から再刻出版された松岡の「マイクロネシア民族誌」に、掲載されている清野謙次の「南洋研究の先覚者松岡静雄大佐を偲ぶ」の中で、清野は次のように指摘している。

「南洋の習俗と言語に精通した人には、誰でも日本の習俗特に古俗と共通せる点が尠なく無いのに氣附く。松岡さんも勿論これに無付いた所ではない。其超凡の精力を発揮して古典研究へと突進せられた。これは不言の間に両兄の感化を受けたのでは無いかと思ふ。すなわち亡井上通泰氏は国文学上から、柳田国男氏は郷土民俗上から古典へと入り込んで居られるが、松岡さんから云ふと南洋の見地からの解釈が乏しく、自分でやって見度くなったのであろう」

しかし、松岡は次のような警告を発することも忘れなかった。

「……音韻変化の法則を無視し、部分的の類似によって濫に語原を推定し、軽々に人種移動の証左とするが如きは、世を惑はすこと甚しきものは言はねばならぬ。……苟も其々の言語について精細なる研究を遂げ、其体系と構造とを明らかにするに於ては、同一種族の間には必ず同系の言語が用いられたという結論に達するであらう。要するに我々の慎まねばならぬのは皮相浅薄なる比較で、言語の本質的対比は人種移動関係を明にする唯一の鍵輪であらねばならぬ」

松岡の著書については論ずべきことが多いが、本稿ではこの辺で次の資料に移りたい。

次に、昭和8（1933）年8月に奈良の宮武正道という青年が、自費で騰写版刷りの「ミクロネシア群島パラオの土俗と島語テキスト」と題する127頁の資料を出している。著者はその「はしがき」の冒頭に次のように記している。

「本書は我が南洋パラオ島コロールの前酋長の子息で、天理教本部に留学の為に來ていた Ngiraked（通線エラケツ）君より、採集した資料をまとめたものである。本書の日本語は昨年『パラオ島の伝説と民謡』と題して、奈良郊外あやめ池東洋民俗博物館より出版したものに、改訂をほどこし新に数篇を加え、余り重要と思われぬもの数篇は之を削除した」

「エラケツ君を尋ねパラオ語で色々な話をして貰い、之をローマ字で書き取り、後からその単語に日本語訳をつけてもらって、家に帰ってから『パラオ語研究』と首引きで色々調べて見るのであつた。

その結果廿年前のパラオ語と現代のパラオ語との間に、かなりな音変化が行なわれてゐる事を知った。その後 S. Walleser: *Palau Wörterbuch* を取寄せて調べて見たが、W師の写音せるものはエラケツ君の発音と相異はあるが、エラケツ君はW師の書いたパラオ語は了解する事で出来るのみならず、之が最もきれいなパラオ語だと称讃するに反し、W師の著書に掲げられたパラオ語を仮名に書き変えたに過ぎない松岡氏の著書に、出て来るパラオ文をエラケツ君が読み流ると言ふ現象を見て、急に音声学に興味を起した。

音声学の基礎を勉強してエラケツ君に話してもらったパラオ語を改めて筆記し直した。しかし、宮武は「最初はパラオの言語を研究するつもりでいたものが、何時の間にか話の方に興味をひかれ出し、……最初の目的であった言語研究が姿を隠し、最悪な方法を取る土俗趣味家に随落してしまった」と述懐している。

宮武の著書は「上篇—神話、伝説、童話の部、民謡の部、雑の部—」（7～60頁）と、「下篇—パラオ語テキストの部、パラオ語—日本語彙、分類パラオ語、パラオ語会話—」（61～125頁）に分かれている。

もう一度「はしがき」からその終りの部分を引用しておきたい。

「私の目的とする所は將に亡びんとする南洋群島の土語を、出来るだけ機会を捉えて之を採集し将来に残すと同時に、之を言語学的に研究して見ようとするにあるのである。……私が此の世の光を見てからまだ21箇年しかたらず、オーストロネシア系の言語研究を思いついてから僅に3年足らずで、未だ謂所一夜づくり

の研究家の誇りを免かれたいのであるから、……さぞ失笑を禁じ得ない様な誤りがある事と思うが、之は先覚諸学者の御教示にあづかり改めたいと切望している。」

ここに無名の青年宮武の著書を紹介する理由は、太平洋戦争以前の日本にもこの種の埋もれた言語研究家が、ほかに居たに相異ないと考えるためである。そして先に引用した宮武の言葉の中の松岡静雄の「パラウ語の研究」批判は、確かに松岡のマイクロネシア語研究方法がもっていた弱点一直接マイクロネシア人の言語に接せず、欧文資料を収集して机上で研究し、ローマ字によらず仮名でマイクロネシア語を表音した点一つをついたものとして評価すべき正しさを含んでいるといえる。

以上で、日本におけるマイクロネシア語に関する研究資料の紹介を終る。そして甚だ勝手ながら、最近における日本人のマイクロネシア語、メラネシア語、ポリネシア語に関する研究成果の紹介は、省略させて欲しいと思う。私とその分野の研究について無知だからであるが、同時に、日本人のこの分野での言語研究のほとんどが、日本語の源流を摸索するという問題意識から出発する傾向にあり、客観的な言語学的研究の道からはずれている、という印象をうけるからでもある。

### 3. ハワイ大学の PALI (太平洋アジア言語学研究所) の資料

アメリカは1898年末からグアムを領有してきたが、チャモロ語の研究は余り行なわれなかった。雑誌論文(それも僅かだが)を別とすれば、1909年に刊行された“The Chamorro language of Guam” (by Wi-

lliam E. Safford. Washington D.C., W.H. Lowdermilk and Co.) と、1918年に出た“Dictionary and Grammer of the Chamorro language of the Island of Guam” (by Edward R. von Preissig. Washington D.C. Government Printing Office) くらいしか、チャモロ語に関する太平洋戦争前の研究成果は出なかったようである。

アメリカにおけるマイクロネシア語、ポリネシア語、およびメラネシア語の研究が盛んになったのは、ハワイ大学に「太平洋アジア言語学研究所」Pacific and Asia Linguistics Institute (略して PALI) が開設されてからのようである。もちろん、ハワイ諸島の原住民はポリネシア人であったから、ポリネシア語の一方言であるハワイ語の調査研究は、19世紀の中頃から行われてハワイ語英語辞典なども編さんされていた。PALI の仕事はハワイ語以外の諸言語について、組織的な調査研究を進めてその成果を刊行することである。

PALI の出版物は“Oceanic Linguistics Special Publications” と、“PALI Language Texts” の2つのシリーズに分かれている。

Oceanic Linguistics Special Publications は1965年から刊行されたが、その多くはハワイにおける英語(このシリーズ No. 9 は Japanese Pidgin English in Hawaii. 著者は Nagara) や、フィリピンの諸言語を対象としている。このシリーズの No. 14 は Reinecke という著者の“A bibliography of Pidgin and Creole languages” (1975年) であるが、アジアやオセアニアには多くのピジン語やクレオール語が存在している。この種の言語は日本ではほとんど研究されていないが、オーストラリア国立大学ではハワイ大学以上に、こ

の種の言語の調査研究が盛んであるため、次の節でその点について簡単に言及することにした。

PALI Language Texts のばあいも、フィリピンの諸言語に関する資料が最も多く、中国語、日本語、ベトナム語に関するものも刊行されているが、ここではこれらの諸言語に関する資料については紹介を省略する。ここで紹介したいのはマイクロネシア諸語、ポリネシア諸語、メラネシア語に関するシリーズに限定したい。最初はマイクロネシア諸語に関するもの、すなわち、PALI Language Texts: Micronesia に属するものである。それをさらに「文法シリーズ」「辞典シリーズ」に分けて刊年順に列挙しておきたい。

Bender, Byron W. "Spoken Marshallese: an intensive language course with grammatical notes and glossary" 1969 463pp.

Topping, Donald M. with the assistance of Pedro Ogo "Spoken Chamorro" 1969 653pp.

Topping, Donald M. "Chamorro Reference Grammar" 1973 296pp.

Josephs, Lewis S. "Palauan Reference Grammar" 1975 450pp.

Lee, Kee-Dong. "Kusaiean Reference Grammar" 1975 554pp.

Sohn, Ho-min "Woleaian Reference Grammar" 1975 336pp.

Harrison, Sheldon P. "Mokilese Reference Grammar" 1976 400pp.

Jensen, Thayer, "Yapese Reference Grammar" 1977 512pp.

次に「辞典シリーズ」を列挙しておこう。

Topping, Donald M., Ogo, Pedro M. & Dungca, Bernadita C. "Chamorro-

English Dictionary" 1975 368pp.  
Lee, Kee-dong "Kusaiean-English Dictionary" 1976 330pp.

Abo Takaji., Bender, Byron W., Capelle, Alfred & Debrum, Tony "Marshallese-English Dictionary" 1976 600pp.

McManus, Fr., Edwin G. "Palauan-English Dictionary" edited and expanded by Lewis S. Josephs, with assistance of Masa-Aki Emesiochel. 1976 512pp.

Sohn, Ho-min, & Tawerilmang, Anthony F. "Woleaian-English Dictionary" 1976 384pp.

Harrison, Sheldon P. & Albert, Salich "Mokilese-English Dictionary" 1977 192pp.

私はこの全部に目を通したわけではないけれども、この PALI Language Texts に見られる特色の一つを、Chamorro-English Dictionary の「序文」から指摘したい。

「子供たちに英語とならんでチャモロ語の読み書きをも、教える責任をもって欲しいという学校に対する希望が、チャモロ人の親たちの間に次第に高まっている、という事実を示す強い証拠がある」  
「幼稚園に通うグアムの子供たちの多くは、英語でしか意志の伝達ができなくなっている。もしこの傾向が続くならば今後一世代のうちに、チャモロ語はグアム人によって話されなくなってしまう、という極めて強い可能性がある」

チャモロ人の親たちはチャモロ語が消滅するのを恐れているわけだが、それはアメ



リカがとってきた同化主義政策への抗議ともいえる。そして現にグアムにおいては Guamanian (グアム人) としてのアイデンティティを確立するには、チャモロ語の普及が必要であり、そのためにはチャモロ語のローマ字表記方法の改善が必要だ、とする運動が起っているという。

これはかつて松岡がチャモロ語——それはサイパンなどグアム以外のばあいだか——を、亡び去る運命にある言語だと考えたうえで、「せめて今のうちに此特異な民族の言語、風習を記録して置きたい」という立場で、調査研究した当時とは全く違った環境になっていることを示している。かつて日本が委任統治下に置き、太平洋戦争後アメリカの信託統治下にあるマイクロネシア諸島でも、1981年に予定される信託統治協定終了後には、自治政府をもつことになっている。そうすれば「国語」をどうするかということについても、すでに島民自ら決定しなければならない段階に来ている。

PALI Language Texts: Polynesia すなわちポリネシア語シリーズは、私の知っている範囲ではまだ次の3冊しか出ていない。

Shumway, Eric C. "Intensive Course in Tongan" 1971 671pp.

Carroll, Vern & Soulik, Tobias "Nukuoro Lexicon" 1973 850pp.

Lieber, Michael D. & Dikepa, Kalio H.D. "Kapingamarangi Lexicon" 1973 384pp.

このうち、ヌクオロ島とカピングマランギ島は、ポリネシア系に属する島民が住んではいるけれども、この二つの島は実際にはマイクロネシア諸島に近く、ポナペ行政区の中に包含されてアメリカの信託統治下にある。そして、この Nukuoro Lexicon の

「序文」には次のような言葉がある。

「このレキシコンはヌクオロ島の人々が、辞書編さんの慣行を確立し、また学童がヌクオロ語のスペリングを標準化するのを助け、英語でよりうまく自己表現するのを学ばせるために、使用することを目的としたものである。さらにまた、ポリネシア諸語間の関係に関心をもつ学者たちの利用に供するためでもある。」

したがって、マイクロネシア語を使用する島々の間にあっても、ポリネシア語の一方言であるヌクオロ語が、消滅しないことを願いながら Nukuoro Lexicon が編集され、刊行されたことが判明する。しかし、トンガ語以外の南半球のポリネシア諸語については、まだ調査研究の成果は刊行されていない。

Language Texts: Melanesia のばあいには、まだ次の一冊が刊行されているだけらしい。

Schutz, Albert & Komaitai, Rusiate T. "Spoken Fijian" 1971.

PALI としてはハワイ島の立地条件からいって、アジアの諸言語を優先的に調査研究の対象とし、次にアメリカの信託統治下にある諸島の言語を重視する、という実際的な配慮による影響をうけざるをえないのであろう。私としてはハワイ語との関連からいっても、赤道以南のポリネシア諸語の Language Texts が、一日も早くシリーズとして刊行されることを切望してやまない。

#### 4. オーストラリア国立大学の Pacific Linguistics 関係 資料について

キャンベラにあるオーストラリア国立大学の Research School of Pacific Studies の言語学部門は、1960年代に入ってから Pacific Linguistics という総称の下に、多くの調査研究成果をシリーズの形で刊行している。

オーストラリアは国内に多くの言語に分かれたアボリジン (Aboriginal, Aborigine) とよぶが、元来 aborigines は土着の原住民を意味する名詞) を抱えており、また、北方に近接したパプア・ニューギニアを統治してきた。したがって、それらの住民の諸言語に関する調査研究は早くから、一部の人間たちによって散発的に行なわれてきた。しかし、組織的にそれらの諸言語の調査研究が計画され、その成果がシリーズの形で刊行され蓄積されて、内外の研究者の利用に供されるに至ったのは、この Pacific Linguistics のシリーズが刊行されるに至ってからのことである。本稿ではアボリジンの諸言語に関する資料は紹介の対象としない。

また、Pacific Linguistics には、フィリピン、ベトナムをはじめ、東南アジアの諸言語に関する研究成果も含まれているが、本稿ではそれらの資料についても紹介を省略して、専らパプア・ニューギニアの諸言語 (その種類はきわめて多く、メラネシア語系とそうでない諸言語に分かれている)、メラネシア諸語、ポリネシア諸語、ミクロネシア諸語に関する資料のみを概観することにする。

Pacific Linguistics は次の4つのシリーズに分かれている。

Series A—Occasional Papers (当館所蔵は No. 46 まで、ただし No. 33 と No. 45 は未刊)

Series B—Monographs (当館所蔵はこれも No. 46 まで、46冊)

Series C—Books (当館所蔵は No. 50 まで、ただし、No. 12, No. 37, No. 39, No. 40 および No. 44~49 までの10冊は未刊)

Series D—Special Publications (当館所蔵は No. 27 まで、ただし、No. 11, No. 13~20, No. 22 の10冊は未刊)

このように当館所蔵は合計147冊に及んでいるが、この中には24冊の本稿対象外の資料が含まれている。

まずシリーズAについてみれば、5種類の Papers in……Linguistics が大部分である。他は「オーストラリアのアボリジン同化における言語の役割に関する若干の考察, Some remarks on the role of language in the assimilation of Australian aborigines が第1号(1963), 「不慣れた言語学的被調査者の扱い方」 Handling unsophisticated linguistic informants が第2号(1964)など、初期に出たパンフレット程度の方法論的なものである。Papers in Australian Linguistics, Papers in Philippine Linguistics, Papers in South East Asian Linguistics, Papers in Borneo Linguistics を除外して、Papers in New Guinea Linguistics から紹介しよう。

最初に掲げる番号は刊行番号である。

No. 3 Pence, A., E. Deibler, Jr. & others—Papers in New Guinea Linguistics No. 1 1964. iv+42pp. (4短篇論文集)

- No. 4 Wurm, S.A.—Papers in New Guinea Linguistics, No. 2 1964 iv+41 pp. 1 map (Wurm の 2 論文)
- No. 5 Healey, P.M.—Papers in New Guinea Linguistics. No. 3 1965 iv+53pp. 3 tables (Healey の 2 論文)
- No. 6 Bee, Darlene—Papers in New Guinea Linguistics No. 4 1965 iv+68pp. (Bee の 2 論文)
- No. 7 Frantz, C.I., M.E. Frants & Others—New Guinea Linguistics No. 5 1966 viii+93pp. (Frantz ほか 6 篇の論文集)
- No. 12 McElhanon, K.A. & G. Renck—Papers in New Guinea Linguistics No. 6 1967 iv+48pp. (2 人の論文)
- No. 13 Goddard, J. & K.J. Franklin—Papers in New Guinea Linguistics No. 7 1967 iv+59pp. (2 人の論文)
- No. 16 Voorhoeve, C.L., K.J. Franklin & G. Scott—Papers in New Guinea Linguistics No. 8 1968 iv+62pp., 2 maps (3 人の論文集)
- No. 18 Capell, A., A. Healey & Others—Papers in New Guinea Linguistics No. 9 1969 vi+110pp., 1 map (5 篇の論文集)
- No. 22 Laycock, D.C., R.G. Lloyd & P. Staalen—Papers in New Guinea Linguistics No. 10 1969 v+84pp. (3 人の論文集)
- No. 23 Bunn, G., R. Bunn & Others—Papers in New Guinea Linguistics No. 11 1970
- No. 25 Voerhoeve, C.L., K.A. McElhanon & Others—Papers in New Guinea Linguistics No. 12 1970 iv+60pp., 1 map (3 人の論文集)
- No. 26 Blowers, B.L., M. Griffin & K.A. McElhanon—Papers in New Guinea Linguistics No. 13 1970 iv+48pp. (3 人の論文集)
- No. 28 Dutton, T., C.L. Voorhoeve & S.A. Wurm—Papers in New Guinea Linguistics No. 14 1971 vi+172pp., 8 maps (3 人の論文集)
- No. 31 Lewis, R.K., S.C. Lewis & Others—Papers in New Guinea Linguistics No. 15 1972 v+69pp. (論文集)
- No. 34 Allen, J., & M. Lawrence—Papers in New Guinea Linguistics No. 16 1972 iii+46pp. (2 人の論文集)
- No. 38 Holgknecht, K.G. & D.J. Phillips—Papers in New Guinea Linguistics No. 17 1973 iii+78pp. (2 人の論文集)
- No. 40 Conrad, R., W. Dye & Others—Papers in New Guinea Linguistics No. 18 1975 iv+102pp., 5 maps (論文集)
- 以上のように短かい論文を 2 篇以上収録した Papers in New Guinea Linguistics には、別にメラネシア語に関するシリーズがある。それはまだ次の三冊にすぎない。
- No. 15 Capell, A., Parker, G.J. & Schutz, A.J. Papers in Linguistics of Melanesia No. 1 1968 iii+52pp. (Capell の Solomon 諸島 Choiseul の言語, Parker の New Hebrides の Ambrym 島南東の言語, Schutz の New Hebrides および Fiji の言語に関する 4 論文集)
- No. 21 Capell, A., Chowning, Ann, & Wurm, S.A.—Papers in Linguistics of Melanesia 1969 v+105pp. (Capell の Solomon 諸島における non-Aus-

tronesian 諸語, Chowning の New Britain 島における Austronesian 諸語, Wurm の Solomon 諸島の Reef および Santa Cruz 諸島の言語に関するもの, すなわち 3 論文集)

No. 35 Beaumont, C., Tryon, D. T. & Wurm, S.A.—Papers in Linguistics of Melanesian, No. 3 1972 vii+113 pp. (Beaumont の New Ireland 諸島の諸言語, Tryon の New Hebrides 諸島の諸言語, Wurm の Solomon 諸島 Reef および Santa Cruz 諸島の言語に関するもの, すなわち 3 論文集)

シリーズ B はモノグラフであるから, 多種多様な調査研究の成果を含んでいる。その中には諸言語の文法研究, 音韻学の研究などが多い。その一つ一つを紹介する余裕はないので, ここでは私が関心をもった一冊で中を例にあげて, 解説しておきたい。

No. 26 Mühlhäusler, P. "Pidginization and Simplification of Language" 1974 v+161pp.

さきにハワイ大学の PALI-Oceanic Linguistics Special Publications の紹介のさい, 「ピジンおよびクレオール諸語のビブリオグラフィ」についてふれた。この Mühlhäusler の研究はパプア・ニューギニアやメラネシアにおいて, きわめて多く見られるピジン語などについて, 言語社会学的な考察を行ったもので, 世界各地のピジン語やクレオール語との比較研究をも含んでいる。

ピジン語やクレオール語は伝統的な土着語ではなく, 欧米人が植民地の原住民と接触したさいに, 双方の言語の中から簡単な表現方法を取りいれて, 相互のコミュニケーションを可能にする一種の合成語であ

る。著者ミュールホイスラーは1973~74年にパプア・ニューギニアでフィールドワークを行ったので, 主たる関心はそのピジン英語にあったといえよう。彼は世界のピジン語, クレオール語の成立と発展を7段階に分けて, ニューギニアのその中には, その第一段階 (白人との初期接触による Pre-Pidgin continuum 段階), 第三段階 (ニューギニアの Police Motu など Pidgin 段階), 第四段階 (初等教育, 新聞, 行政メディアに用いられる Highly sophisticated Pidgin 段階), 第五段階 (ハワイのクレオールやニューギニアの一部のピジンなど, 部族間, 人種間の結婚から成立する Initial Creole 段階) に, それぞれ分類される多様なピジン英語があるという。

日本ではこの種の言語には無関心であるけれども, 今後は Pidginization や Simplification of language は, 最近の日本語にあらわれている現象を研究するうえにも, 必要となってくるのではあるまいか。

Pacific Linguistics のシリーズ C は単行本としての形態と内容をもつもので, その内容は多種多様であるが, メラネシアの言語などの辞書も18冊含まれている。しかし, その中には No. 6 の Tryon, D.T. "Dehn-English Dictionary" 1967 と, No. 7 の同じ編者の "English-Dehn Dictionary" 1967 のように, 1言語の辞書が2冊に分かれて刊行されているものもある。

私は一例として次の辞書を調べてみた。

No. 2 Grace, G.W. "Canala Dictionary (New Caledonia)" 1975 viii+128pp.

Canala というのは New Caledonia 本島の東岸の地方名であって, 部族の名称ではない。したがって, 篇者も緒言の中で「より適切に言えば nāā Xārāci であり, したがって Xārāci 人 (pa Xārāci) の言

語である」といっている。しかし、古くからフランス人が *laugue de Canala* と呼んでいたもので、それに従ったものにはかならない。辞書であるから内容紹介の必要はないが、私はこのメラネシア語の中にポリネシア語の影響があると考え。 (端的な例はサツマイモが *Kum<sup>W</sup>ara* であること)

シリーズ D は、*Special Publications* (*Bulletins, archival materials and other publications*) で、*language map* などここに含まれる。しかし、このシリーズのものに関する紹介は省略する。

オーストラリア国立大学の *Pacific Linguistics* は、ポリネシア語やマイクロネシア語に関する調査研究が少ない。それはやはり地理的に遠いからであろう。しかし、たとえばシリーズ B の No. 17 には Kuki, H. “*Tuamotuan Phonology*” 1970 ix+119pp. があり、またシリーズ C の中の最も部厚い次の論文集の中には、Maori 語会話の特色を論じたもの、ポリネシア語とフィジ語の文法に関する論文、トンガ語の中の英語の音韻学的影響を扱った論文など、3 篇を含んだ No. 13 Wurm, S.A. & Laycock, D.C. 編集の “*Pacific Linguistic Studies in Honour of Arthur Capell*” 1970 viii+1292pp. などがある。

また、マイクロネシア語に関する論文としては、上記のシリーズ C. No. 13 の中にカロリン諸島の *Puluwat* 語に関するものが含まれているのと、シリーズ D の *Special*

*Publications* の No. 7 に、上記論文と同じ著者 Samuel H. Elbart の “*Three legends of Puluwat and a bit of talk*” 1971 viii+85yy. がある。その後 Elbert はシリーズ C の No. 24 として、 “*Puluwat Dictionary*” 1972 ix+401pp. を出している。マイクロネシア語については専ら一人の学者の一つの島の言語研究に頼っているといえる。

オーストラリア国立大学の *Pacific Linguistics* の出版物は、パプア・ニューギニアやメラネシア諸島の言語に、関心をもつ者にとっては他に類のない情報の宝庫といえよう。

## 5. おわりに

以上で非常に急いだ粗雑な形でのマイクロネシア語、メラネシア語、およびポリネシア語に関する文献の紹介を終る。こんな形になった理由の一つは、8月15日からオセアニアに行かなければならないため、落着いて文献に目を通す余裕がなかったことにある。この旅行ではオーストラリア国立大学にも、ハワイ大学にも立ち寄ってくる予定なので、私としては9月下旬に帰国してから執筆したかったが、原稿締切りを尊重するためには止むを得ないことであった。

言語学については全く門外漢の私ではあるが、今後は南太平洋の諸言語について勉強してみたいと思っている。

(にしひの・てるたろう)